

第4講：58 「今日は、河内から」

この逸話から学ぶことができるのは、お道の信仰における導きや不思議なすけ、教祖の温かい親心や教祖は見抜き見通しであること、またおぢばがえりの意義などが考えられる。今回の講座では、タイトルにある「河内」という地名（当時は国名）に注目し、同地の先人たちを紹介した後、天理教の伝播における河内や大阪の特徴をあげ、天理教伝道史の視点からこの逸話を考えてみた。

1. 河内国

『稿本天理教教祖伝』には、「明治三年、四年、五年と、珍しいたすけは次々と現われ、親神の思召は大和の国境を越えて、河内、摂津、山城、伊賀と、近隣の国々へ弘まった。」(107頁)と記されている。現在の大阪は、当時摂津、河内、和泉に分かれており、大和（奈良）に隣接している河内には、早くからお道の教えが伝わっていた。幕末には、教祖の噂が河内一帯に広まり、お屋敷にお参りに来る人がいた。明確に記録に残っており、また後の教えの伝播に大きな影響を与えたという点で、河内で最も早い信仰者は、教興寺村の松村家であると言われる。その後、明治6年に河内柏原村の山本利八、利三郎父子、続いて大泉村の増井りんが信仰を始めた。こうして河内では、多くの信者が生まれ、お道の伝播に大きな働きをした先人たちを輩出した。

2. 山田長造と刑部村の先人たち

今回の逸話篇に出てくる山田長造は、安政4年（1857）10月13日、河内郡曙川村刑部（現、大阪府八尾市刑部）で出生した。10代後半に病気を患い、長いこと床に伏せることになった。そして、今回の逸話となるのである。奇跡的なご守護をいただいた長造の様子を見た刑部村の人々、とくに青年団の若者たちは、非常に驚き、またその理由を尋ねた。その中には、後に南大教会の初代会長となった松永好松、本部員となった松田音次郎などがいた。こうして、長造の奇跡的な救かりの話が、刑部村を中心としてその周囲の村々にも伝わり、お道の信仰が広がった。青年団の一行がおぢばがえりをした際、教祖から「あんた方はみな揃うて、年が若いのに神を敬う心が非常につよい。敬神組と名づけたがよかろう」（天理大学附属おやさと研究所編『天理教事典 第三版』天理大学出版部、2018年、946頁）との言葉をいただき、この刑部村に、松田音次郎を講元として、敬神組が結成された。

その後、長造は、河内の大水害にあい、明治18年に摂津国西成郡西中島村川口（現、大阪市淀川区）へ移住した。この地でも農業と人力車夫の仕事をするかたわら、熱心に布教活動に従事し、自身の奇跡的に助かった体験や、妻のおびや許しによるご守護などを通じて、徐々に信心する者が出来てきた。その中には、後の西成大教会の初代会長小山弥三七もいた。長造は大家族を抱えており、布教のみに専念することが難しかったので、この小山を講元として、明治23年に川口集談所が結成される。この集談所が明治25年に西成出張所となり、その後、西成大教会へと発展した。長造は、西成の小山（初代）、結城安蔵（2代）、中尾善治郎（3代）の歴代会長を支え、永年にわたり教会の役員をつとめ、西成の発展に貢献した。

3. 天理教伝道にみる河内・大阪

天理教伝道の歴史の初期段階において、河内や大阪出身の先

人たちの活躍が多くみられる。天理教伝道における河内、大阪の特徴として、奈良に隣接しているという地理的条件は第一にあげられる。大阪は「奈良に隣接し歴史的に結びつきが強い。『天下の台所』と呼ばれた経済の中心地であり、奈良のみならず周辺地域と交流が盛んであった。このような日常の往来に天理教の信仰が伝わり、また伝道の機会も多かった」（早田一郎『天理教伝道史の諸相』天理大学出版部、2015年、24頁）。また、大阪に天理教の教えが伝わった時点で、信仰の質が変わったとも言われる。「道が大和に伝わった段階では、純農村の信心であったと言ってよい。しかし、十三峠を越えてからは少し様子が変わっていった。河内という準農村の信心を経て、大和のそれと異質の都市型、商工人型信者の道となった」（天理教道友社編『道—天理教伝道史をあるく』天理教道友社、1990年、68頁）。さらに、大阪から「四国、東京、九州などへ直接伝道され、さらにその先き全国各地に伸びて行く。全大教会の半数程度が大阪を経て伸び広がったものと見られる」（早田、26～27頁）ように、大阪から日本の各地へと道が伝わっており、大阪は天理教伝播の中継基地のような役目を果たしたといえる。

4. 「しるべ石」

山田長造は「ある日、綿を買い集めに来た商人から、大和の庄屋敷には、不思議な神様が居られると聞き、それがきっかけとなっておぢばにかえり、入信した。天理教が広まっていく過程において、白熱の布教活動を展開した先人たちの働きは非常に大きい。そうした布教師たちだけではなく、いわゆる「名もない」人々の口伝えによって広まっていったという点も否めない。『稿本天理教教祖伝逸話篇』では、知人、隣人、近所の人、商人、茶屋の老婆、道連れになった人などによって、お道が伝わった話があげられている。「庄屋敷村の生き神さん」「大和の神さん」の噂は、天馬空を駆け、八方に伝わった。街道を往来する旅人や行商人、職人、あるいは茶屋や旅籠の、名もなき人々が媒介をなした。……街道筋は旅人や行商人が数多く行き来した。とりわけ行商人は情報伝達の役割を担った。大和に不思議なお産の神さんがいるような、どんな病も治してくれる神さんだそうな……噂が噂を呼んで、流浪する人たちを大和へ大和へと導いた」（天理教道友社編、18頁）のであり、「名もなき人々」が、多くの人々をお道へと誘う「しるべ石」としての役割を果たしたのである。

おわりに：現代における「伝わる」と「伝える」

今回の逸話「今日は、河内から」は、おぢばがえりの記録としての逸話ともいえる。山田長造は、「名もなき人」の導きによってたすかる道を教えてもらい、見抜き見通しの教祖がお待ちくださるぢばへと帰り、直々に教祖にあつて、ご守護をいただいたのである。そういった逸話の味わい方に加え、長造の不思議なたすけから始まった刑部村の信仰とその広がりから、お道の「伝わる」「伝える」ということを考えてみた。この逸話から、教祖の温かい親心を感じるとともに、天理教伝播という視点からとらえ、現代社会でいかにして教えが伝わっていくか、教えを伝えていくかを考えることも、この逸話の味わい方の一つであろう。